

21世紀初頭ケーララ州 ナンブーディリ・ブラーマンの ショーダシャ・クリヤー(十六儀礼)とその特徴

梶原 三恵子

1. はじめに

南インド・ケーララ州のナンブーディリ・ブラーマン（バラモン）は、現代までヴェーダ伝承を比較的よく保存していることで知られる。本稿は、21世紀初頭のナンブーディリたちが行っている、あるいは行うべきことになっている、16件の儀礼を一覧にした「ショーダシャ・クリヤー（*śoḍaśa-kriyā*〈十六儀礼；十六行事〉）」について論じる。

2009年から2018年にかけて、筆者はケーララ州中部トリシュール近辺にて、同地のヴェーダ伝承状況の調査と、ヴェーダ文献を中心とした写本の探索・撮影を行った¹。その過程で各学派のショーダシャ・クリヤーに関して得た情報を、まず整理して提示する。その上で、現代インドの各地にみられる、同じく16件の儀礼をまとめた一覧（「ショーダシャ・サンスカーラ（*śoḍaśa-saṃskāra*）」と一般によばれる）と、ケーララのショーダシャ・クリヤーを比較し、ケーララの伝統の特徴とその背景を考察する。

結論を一部先取りして本稿の議論の見通しを示しておく、ケーララの儀礼一覧と、他地域にみられる儀礼一覧とでは、内訳に大きな違いが二つある。一つはヴェーダ伝承に必須であるヴェーダ聖典学習に関わる諸儀礼の扱い、もう

一つは葬礼を儀礼一覧に含めるか否かである。これらの相違点は、ヴェーダの伝統がどの程度その地に存続しているかという点と連関している。このことをふまえて、ケーララのヴェーダ伝承と儀礼一覧について以下に論じていく。

2. ヴェーダの伝統における諸人生儀礼の系譜

結婚、受胎、子供の誕生、成長の諸過程など、人の生涯の節目に行われる人生儀礼は、世界各地にみられる。インドもまた例外ではない。

前12世紀から前3世紀頃にかけて成立したヴェーダの宗教（バラモン教）の聖典であるヴェーダ文献は、複数学派の祭官が協働して執行する共同体祭式（シュラウタ祭）を基本的な主題とし、人生儀礼などの家庭内の諸儀礼（グリヒヤ祭）は周縁的な位置づけにある。とはいえ一部の人生儀礼への言及は古くから随所にみられる。たとえば、最古のサンスクリット語文献『リグヴェーダ』（前12 - 前10世紀頃）の最新層には、結婚儀礼と葬送儀礼に関わる詩節を集めた讃歌が収められている²。『リグヴェーダ』について古い『アタルヴァヴェーダ』（前10世紀頃）にも、いくつかの人生儀礼と関係するとおぼしき祭文がみられる。シュラウタ祭儀書であるブラーフマナ群（前8世紀頃）や、シュラウタ祭に関する思弁を出発点とした哲学書であるウパニシャッド群（前6世紀頃）にも、入門や子供の誕生など、グリヒヤ祭の範疇に属する儀礼に関連する短い章や節が断片的に含まれている。

種々の人生儀礼は、家庭儀礼を主題とするグリヒヤーストラ群（前3世紀頃）に至って、体系的に規定される³。さらにはヴェーダ時代の後も、人生儀礼に関するサンスクリット語のマニュアル類（プラヨーガ、パッダティなど）が作られ続けた。また、インドの各地域・各時代の言語による儀礼マニュアルも、サンスクリット語のものに準拠して作られて、使われるようになっていった。

結婚や子供の誕生などは、あらゆる階層の人々に関係がある事柄である。一

21世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのショーダシャ・クリヤー(十六儀礼)とその特徴方で、ヴェーダ聖典の学習は、特定の階級の子弟にのみ課されるものである。グリヒヤストラとその後のダルマ文献は、四ヴァルナのうち、バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシュヤという上位三階級の子弟がヴェーダを学習すべきであることと、シュードラはヴェーダを学べないことを規定する。ただ実際にヴェーダ聖典学習に相当な時間を充てて注力できたのは、一部の王族などを除いて、ほぼバラモンに限られたようである⁴。

現代ケーララのショーダシャ・クリヤーは、後述するとおり(5.1)、ヴェーダ聖典学習に関する儀礼がかなりの割合を占める点に特徴がある。ショーダシャ・クリヤーがナンブーディリのものとみなされているのはこのためと考えられる。

3. 儀礼一覧を特定の数にまとめる動き

3.1. ダルマ文献における「サンスカーラ」一覧

グリヒヤストラから紀元前後のダルマ文献以降にかけて、バラモン(理論上は上位三階級すべて)が生涯において行うべき人生儀礼が「サンスカーラ(samskāra)」とよばれるようになる⁵。「サンスカーラ」は、「形作る；完全にする(sam-skr̥)」という動詞から作られた名詞で、グリヒヤストラ新層以降、人生儀礼の文脈で「[人間を一人前に]形作って完成させること；そのための儀礼」を意味するようになった。なかでも、上位三階級の男子が幼少期(階級によって8歳から12歳頃と規定されている)に行う入門式はその代表格で、「サンスカーラ」の語ないし sam-skr̥ の過去分詞だけで示されることがある⁶。女子には、男子の入門式に相当するサンスカーラとして結婚式が挙げられることがある⁷。

生涯に行う諸儀礼の一々をサンスカーラとよぶようになるのと並行して、それらを特定の数の一覧にまとめる動きがあらわれた。よくみられる数は、16、

18、40 などである。こうした、特定の数の儀礼を列挙する比較的古い例に、『ガウタマ・ダルマストラ』（紀元前後頃か）がある。以下のとおり、40 のサンズカーラが数えあげられる。一部の複合語の区切りを示すハイフンと訳文の小見出しは筆者による。

Gautama-Dharmasūtra 1.8.14-22 (= 8.14-21)

garbhādhāna-puṃsavana-sīmantonayana-jātakarma-nāmakaraṇa-
annaprāsana-caula-upanayanam /14/ catvāri vedavratāni /15/ snānam saha-
dharmacāriṇīsamyoḡaḥ /16/ pañcānām yajñānām anuṣṭhānam deva-pitṛ-
manuṣya-bhūta-brahmaṇām /17/ eteṣām ca /18/ aṣṭakā pārvaṇaḥ śrāddham
śrāvany āgrahāyaṇī caित्रy āśvayujīti sapta pākayajñasamsthāḥ /19/ agnyādhe-
yam agnihotraṃ darśapūrnamāsāv āgrayaṇam cāturmāsyaṇī nirūḍhapaśu-
bandhaḥ sautrāmaṇīti sapta haviryajñasamsthāḥ /20/ agniṣṭomo 'tyagniṣṭoma
ukthyaḥ ṣoḍaśī vājapeyo 'tirātro 'ptoryāma iti sapta somasamsthāḥ /21/ ity
ete catvāriṃśatsamskārāḥ /22/

【A. 14 種の人生儀礼】

(1) 受胎、(2) 男児出産祈願、(3) 妊婦の髪分け、(4) 誕生儀礼、(5) 命名、(6) お食い初め、(7) 結髪式、(8) 入門式、/14/ (9, 10, 11, 12) 4つのヴェーダ学習誓戒、/15/ (13) [学習修了の] 沐浴、(14) 共に正しい振る舞いを行う女性（正妻）との結婚。/16/

【B. 5 種の供犠（パンチャ [マハー] ヤジュニヤ〈五大祭〉）】

5つの儀礼の挙行、[すなわち] (15) 神々、(16) 祖霊たち、(17) 人間たち、(18) 諸存在、(19) ブラフマンへの [儀礼の]。/17/

【C. 7 種のパーカヤジュニヤ】

そして、以下の [諸儀礼の、すなわち]、/18/ (20) アシュタカー、(21) パールヴァナ、(22) シュラーツダ、(23) シュラーヴァニー、(24) ア

21世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのショーダシャ・クリヤー(十六儀礼)とその特徴
ーグラハーヤニー、(25) チャイトリー、(26) アーシュヴァユジー、と
いう7つのパーカヤジュニヤの遂行。/19/

【D.7種のハヴィルヤジュニヤ】

(27) 祭火設置祭、(28) アグニホートラ、(29) 新満月祭、(30) アーグ
ラヤナ、(31) チャートルマースヤ、(32) ニルダ・パシュバンド、(33)
サウトラーマニー、という7つのハヴィルヤジュニヤの遂行。/20/

【E.7種のソーマ祭】

(34) アグニシュトーマ、(35) アティアグニシュトーマ、(36) ウクティヤ、
(37) ショーダシン、(38) ヴァージャペーヤ、(39) アティラートラ、(40)
アプトールヤーマ、という7つのソーマ祭の遂行。/21/

【計40サンスカーラ】

というこれらが、40のサンスカーラである。/22/

この一覧で注目すべきは、グリヒヤストラが扱う諸儀礼(人生儀礼、五大祭、7つのパーカヤジュニヤ)だけでなく、シュラウタ祭(7つのハヴィルヤジュニヤ、7つのソーマ祭)も、サンスカーラとして数えられているということである。生涯に行うべき諸儀礼の一覧とみれば不自然ではない。後にはサンスカーラの一覧は、このようにシュラウタ祭も含むものと、人生儀礼だけのものにわかれていき、後者が主流になっていく。

時代が下がるにつれて特に普及していくのが、サンスカーラを16と数える方式である。これがショーダシャ・サンスカーラである。16という数字が、ヴェーダ時代以来、ヒンドゥー文化でひろく愛好された⁸ということが背景にあったとみられる。

3.2. 中世ケーララの文献における「16の儀礼」への言及

14世紀頃の『ケーララ・アーチャーラ』(「ケーララの[正しい]行い」、別名『シ

ヤーンカラ・スメリティ』に、「16の儀礼」への言及がある⁹。儀礼は「サン
スカーラ」でなく「クリヤー」(kriyā「行い；行事；儀礼」)とよばれている。

Kerala-Ācāra (=Śāṅkara-Smṛti) 1.12.4.12ab

kriyāḥ ṣoḍaśa kurvīta yathākālam yathāvidhi /

16の儀礼を、[しかるべき] 時期に従い、儀軌に従って、行うべきである。

近現代のケーララでも、儀礼一覧に数えられるのは16が一般的で、最初に
述べたとおり「ショーダシャ・クリヤー」とよばれている。

4. ケーララのヴェーダ伝承

4.1. 「学派」の意識

現代ケーララのヴェーダ伝承は、写本の形で伝わっている文献、祭式の挙行、
ヴェーダ聖典を次世代に学ばせる教育、という3つの柱からなる。

ヴェーダ聖典は、四ヴェーダ(リグヴェーダ、サーマヴェーダ、ヤジュルヴ
ェーダ、アタルヴァヴェーダ¹⁰)に属する「学派」の単位で伝承される。バラ
モンの各家系は、どの学派に所属するかが代々決まっている。現代のナンブ
ディリも例外ではない。彼らは自分の所属学派だけでなく、姻戚たちがそれぞ
れどの学派のどういう名の家系であるかも数代に遡って記憶しており、近隣の
家々の所属学派についても知悉している。

このように当事者の意識に浸透している「学派」が、特に表面に浮かびあが
る場面は、大きくわけて三つある。

一つは、入門式の後で学ぶ対象である。リグヴェーダの家系の者であれば『リ
グヴェーダ』を学ぶ¹¹。二つめは、ヴェーダ祭式のうち、シュラウタ祭におけ
る祭官の役割分担である。リグヴェーダ、サーマヴェーダ、ヤジュルヴェーダ

21世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのショーダシャ・クリヤー(十六儀礼)とその特徴では、担当する役割と、朗唱する祭文が異なる。さらに、同じヴェーダ所属でも学派ごとにシュラウターストラがあり、儀軌の細部に違いがある。

三つめが、学派ごとにみられる、家庭儀礼の儀軌である。これもまた、各学派のグリヒヤーストラの規定に準じて、学派ごとにある程度の差異がみられる。

現代の祭式・儀礼が、古代のーストラ文献に準じて学派ごとに細かい相違をみせるのは、シュラウタ祭もグリヒヤ祭も同様である。ただ現代では、シュラウタ祭はもはやナンブーディリ社会全体に溶け込んだものとはなっていない。三祭火を保持している家庭の数は限られている。それらを用いて行う毎朝夕および新月満月の祭式は観客がいるわけではない¹²。大規模なシュラウタ祭式、特に現地でアティラートラとよばれているアグニチャヤナ祭は、いまでは一種の地域イベントのようになって大観客を集めているが(4.4で後述)、一人の祭主がこれを挙行するのは現代では事実上一生に一度であるから、年間にみられる回数はおのずと限られる。これに対して、結婚式や入門式などの家庭儀礼は、どのナンブーディリ家庭でも行われるから¹³、人々が日常的かつ継続的にふれる身近なものとして存在している。

家庭儀礼の学派ごとの儀軌は、上述のとおり、各学派のグリヒヤーストラにみられるそれとよく一致する。学派ごとに儀礼作法の違いがあることは、ヴェーダ伝承に関わっていない一般のナンブーディリも理解している。特に結婚式は、新郎と新婦が別学派に属することが珍しくなく、それぞれの親族や知人たちが数多く招かれて祝うため、参加者が自学派以外の作法を目にする機会になっている¹⁴。生まれた子供の成長過程の諸儀礼も、父母双方の家系の親族が数多く参加して祝う。子どもたちがそれぞれ違う学派の相手と結婚して家庭を築くと、親族たちには、よりさまざまな儀礼作法を目にする機会が増える。

ナンブーディリの家庭儀礼を司る祭官はオーイッケン(Öykkkan)とよばれる。所属学派の師匠格かそれに準じる家系の人物が務める。各家系のオーイッケンをどの家系が務めるかは代々定められている¹⁵。

4.2. 儀礼文献

ケーララ州には、かなりの数のヴェーダ文献の写本が伝わっている¹⁶。古いものは乾燥させたヤシの葉を用いた貝葉写本で、マラーヤラム (Malayālam) 文字で書かれている。各学派の師匠格あるいはそれに次ぐ家柄のナンブーディリ邸に私蔵されているほか、一部については写し (貝葉および紙；文字はマラーヤラムかデーヴァナーガリー〈Devanāgarī〉文字) が、ケーララないし近隣州の図書館に所蔵されている。

人生儀礼を含むグリヒヤ祭に関するサンスクリット語文献には、ヴェーダ期のグリヒヤーストラと、その後の時代に作られた注釈類、儀礼マニュアルであるプラヨーガ、韻文で梗概をまとめたカーリカーなどがある。これらは、現代では実用にあてられてはいない。シュラウタ祭、グリヒヤ祭のいずれにおいても、マラーヤラム語によるマニュアル (「チャダンガ」*Çaṭaṅṅū*) が参照されている。

グリヒヤ祭を解説するチャダンガは、ケーララ在住の三ヴェーダ5学派¹⁷のすべてが、それぞれのものを有している。タイトルには「グリヒヤ」とは特に付されず、各学派の名称に「チャダンガ」と付されているものが多い¹⁸。日常用いられるものはマラーヤラム文字で活字出版もされている。チャダンガの年代はさまざまとみられるが、一代前の家長が執筆し出版した、比較的新しいものを使っている学派もあった¹⁹。各チャダンガは、目次を概観する限りでは、グリヒヤーストラにある諸項目に加え、ヴェーダ期以降のヒンドゥーの儀礼²⁰も扱っている。

4.3. 現代ケーララにおけるヴェーダ祭式

上述のとおり、ヴェーダ祭式の柱となるのは、複数家系の祭官が協働して行うシュラウタ祭である。毎朝夕に家長夫妻²¹のみで行う小規模なものから、長期間にわたって大人数で行うものまで、さまざまな種類のものがある。ヴェー

21世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのショーダシャ・クリヤー(十六儀礼)とその特徴
ダ時代から、バラモンはみなシュラウタ祭を行うべきとされてはいるものの、
いったん祭火設置祭を行ってシュラウタ三祭火を所有すると、死ぬまでのあい
だ、最低限、毎朝夕と新月満月ごとの祭式を行わねばならないため、特に現代
社会では日常生活との両立の負担は軽くない²²。それでも、ケーララの主要家
系では大規模なソーマ祭が20世紀後半まで行われていたと伝わっている。さ
らに、21世紀に入ってからは、複数の要因によって大規模祭式の挙行回数は
増加傾向にある²³。祭式はチャダンガに拠って進められるが、ヴェーダ時代の
シュラウタストラの規定がかなり忠実に保存されている²⁴。

一方、家庭内での儀礼であるグリヒヤ祭は、家長が家庭祭官とともに行う。
結婚や子供の誕生など、人々の生活に密着し、どの時代にも必要なものである。
小規模とはいえ親族たち、場合によっては近隣の人々もが参会する。そのため、
各儀礼の存在や作法が忘れられたり途絶えたりということは起こりづらく、シ
ュラウタ祭が人員と費用を確保し挙行を継続するために相当な労力を要するの
に比して、むしろ伝統が保持されやすいという面がある。

グリヒヤ祭も、現代では各学派のチャダンガに拠って行われている。筆者が
入手した過去のものの録画や、筆者自身が観察したものをみる限り、結婚式や
入門式などの主要な儀礼は、ヴェーダ時代より後の要素も加わってはいるもの
の、核となる儀軌は、各家庭が属する学派のグリヒヤストラのものとよく一
致している²⁵。唱えられる祭文(マントラ)も、シュラウタ祭と同様、基本的
にサンスクリット語である。そしてそれらも、各学派のグリヒヤストラにあ
るものと対応している。

現代のナンブーディリが行っている儀礼には多種多様なものがあるが、彼ら
はヴェーダとタントラを区別しているようである。「クリヤー」というときは
ヴェーダ由来の儀礼をさす。クリヤーは前述のとおりチャダンガに沿って行わ
れるが、彼らは「クリヤーはグリヒヤストラに定められている」という言い
方をする。すなわち彼らには、ショーダシャ・クリヤーに数えられる儀礼は古

代のヴェーダに遡るものだと意識されている。

4.4. ヴェーダ聖典の教授・学習の現況とその背景

ヴェーダ文献のうち、前12世紀から前6世紀ごろまでに成立した聖典（サンヒター、ブラーフマナ、アーラニヤカ、ウパニシャッド）は、古代より、口頭で師から学生に教えられるものであった。グリヒヤスートラの規定では、バラモン階級の子弟は8歳前後に入門式（ウパナヤナ）を行い、師のもとで一定期間ヴェーダを学習し、修了式（サマーヴァルタナ）を行って実家に帰り、結婚すべきとされる²⁶。入門年齢の上限も定められている（バラモンの場合は16歳まで）から、入門時期はある程度柔軟に運用されていたとみられる。

現代のケーララでも、口頭によるヴェーダ伝承が一部で継続している。

20世紀前半までは、主に師匠格の家系において、サンヒターの全部とブラーフマナおよびウパニシャッドの一部の教授と学習が、家庭内あるいは同じ学派の師匠のもとで行われていたらしい²⁷。一方で、現代の学校教育を受ける少年たちがヴェーダをも学ぶことは容易でなく、20世紀後半にはすでに、師匠格の家系であっても親世代ほどには子供たちがヴェーダを学ばなくなっていたという調査報告がある²⁸。

21世紀初頭現在、ヴェーダの教授と学習は、州内各地に点在するヴェーダ学校——トリシュール市中心部にあるブラフマ・スヴァ・マタ²⁹のように比較的大規模で寮施設も備えたものから、村で師匠が一人で教える小規模なもの（パータシャーラ〈pāthasāla〉、サンスクリット語ではパータシャーラー〈pāthasāla〉）までがある——を中心に、通常の学校教育と並行して行われている³⁰。

ケーララに限らず、現代インドのヒन्दゥー社会では、バラモンの子弟は最低限、入門式と修了式は経なければならないことになっている。ただし入門から修了までの間に実際にヴェーダ学習を行うかどうかはまた別の話で、ケーララにおいても20世紀後半にはすでに、他地域と同様、この両儀礼の間に時間を

21世紀初頭ケーララ州ナンバーディリ・ブラーマンのショーダシャ・クリヤー(十六儀礼)とその特徴
おかず、一日のうちに両方ともを形だけ済ませる例が多くなっていったという³¹。

2010年代に行った聞き取りの範囲では、当時40歳代から50歳代のナンバーディリ男性の場合、入門式と修了式の間に数日から数年の間をとって、ヴェーダの一部を暗唱するか、師匠が一通り朗唱してくれるのを聞くという形で、ある程度の学習をしたという人が複数いた。30歳以下の人々になると、入門式と修了式を同日に済ませてしまい学習には進まなかったという例が多くなった。一方で、ごく一部の師匠家系の子弟に限られはするものの、早いうちに修了式を済ませたうえで、さらにヴェーダ学習を続けている、あるいは間をおいて再開したという例が、筆者が直接出会っただけでも何人か確認された。

修了式後の学習継続を可能にしているのは、「学習誓戒」によって学習の段階を区切るというグリヒヤストラ時代からのカリキュラムの弾力的運用とみられる。5.2でも後述するが、学習誓戒とは、特定の箇所を学ぶ際に簡単な儀礼を行い、誓戒ごとに定められた生活制限を一定期間遵守するというものである。本来は入門式を行い学生として身を慎む生活を送る期間だけでヴェーダを最後まで学ぶことができるはずであるが、グリヒヤストラは、入門式の後でヴェーダの基礎部分を学ぶのに加え、より秘義性の高い部分を学ぶ際には、より厳しい生活制限を一定期間課す。基礎部分と秘義部分の学習が、学習誓戒を行うことで区切られる形になっている。

現代のケーララで、一部の人々が修了式の後も学習を継続ないし再開する背景には、いくつかの要因が考えられる。

一つは、祭主としてシュラウタ祭を挙行したかどうか、その人のナンバーディリ社会における地位と密接に関係していることである。祭火設置祭(アグニアーデーヤないしアグニアーダーナ; ケーララではアーダーナとのみよばれることが多いようである)、基本のソーマ祭(アグニシュトーマ; ケーララではソーマ・ヤーガムとよばれる)、最大規模のソーマ祭(アグニチャヤナ; ケーララではアティラートラとよばれる)と、順を追ってより大規模なものを挙

行することが、次の段階の祭式挙行権獲得の条件となっていて、それぞれの挙行後にはそれに合った称号が付与される³²。

さらには上述の、21世紀に入ってからの大規模ヴェーダ祭式挙行回数の増加がある。この現象の背景は Mahadevan and Staal [2005] および藤井 [2012] に詳しいが、大規模祭式が地域の祝祭色をも帯びようになっている。他州や海外からの観客も数多くうけいれ、ナンバーディリ以外の階級の富裕層からもスポンサーがついて、一部のナンバーディリには祭式挙行が一定の収入源となりはじめた。特に多くの観客を集めるアグニチャヤナ祭は、広い野外で、鳥の形にレンガを積んだ大祭壇を用いて行うものであるが、ほぼ一年をかけて準備が行われ、設営と祭具類の作製に人員がつぎこまれるとともに、会期中は多くの祭官が関与する。これらのすべてに賃金や報酬が生じる。補助祭官として若者たちが起用されるため、ヴェーダの学習をほとんどしないまま修了式を形だけ終えた若い世代のうち、少なくとも主要伝承家系に属する人々には、祭官を務めるためにも改めて学習を再開するモチベーションになり得るようになってきている³³。

5. ケーララのショーダシャ・クリヤー

5.1. 十六儀礼の内訳

前述のように、現代ケーララのナンバーディリは、儀礼一覧をショーダシャ・クリヤー（「十六儀礼」）と称している³⁴。後掲の別表1は、ケーララの各学派の一覧に含まれる儀礼を示したものである。

筆者が各学派のショーダシャ・クリヤーの内訳と順序について聞き取りを行ったとき、師匠格家系の人々やヴェーダ学校で教師を務めている人々は即答したが、ヴェーダ伝承に直接関わっていない人の場合、数えあげているうちに16を超えてしまう例が一度ならずあった。チャダンガが扱う人生儀礼と年中

21世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのショーダシャ・クリヤー(十六儀礼)とその特徴行事の数が16よりはるかに多いために、その中のどれがショーダシャ・クリヤーを構成するのかわからなくなるようであったが³⁵、最終的にはみな、自学派の16の内訳と順序について一致した見解に行き着いた。

ナンブーディリのショーダシャ・クリヤーは、インドの他地域のショーダシャ・サンスカーラと比べ、際立って異なる特徴を二つ有する。

一つは、16の儀礼のうち、ヴェーダ聖典学習に関連する諸儀礼と、ヴェーダ祭式とが、あわせて半数近くを占めることである。別表1にあるうち、入門式(Upanayana)、学習誓戒(ヴェーダヴラタ〈vedavrata〉)4つ、修了式(Samāvartana)の、計6つがヴェーダ学習関連の儀礼で、祭火設置祭([アグニ]アーデーヤ〈[Agni-] Ādheya)または[アグニ]アダーナ〈[Agni-] Ādhāna)：シュラウタ三祭火を初めて設置する祭式)は、シュラウタ祭の一つである³⁶。

別表2は、Pandey [1969]に基づくショーダシャ・サンスカーラの一覧と、Knipe [2015]に基づく現代アーンドラのそれの一覧である。Pandeyは典拠となった学派を示していないが、各種ウェブサイトにもみられるショーダシャ・サンスカーラの解説とほぼ一致しているため、現代インドの多くの地域で一般的に受け容れられているものとみて差し支えないと考えられる。

別表1: 現代ケーララにおけるナンブーディリ諸学派の十六儀礼

		Āśvalāyana (RV)	Kauṣītaki (RV)
1	受胎儀礼	<i>sekaṃ</i>	Garbhādhāna
2	男児祈願儀礼	Puṃsavanaṃ	Puṃsavana
3	妊婦髪分け	Sīmantaṃ	Sīmanta
4	誕生儀礼	Jātakarmaṃ	Jātakarma
5	命名儀礼	Nāmakaraṇaṃ	Nāmakaraṇa
6	初外出	<i>vātir puṛappāṭṭi</i>	Niṣkramaṇa
7	お食い初め	<i>coruṅṅi</i>	Annaprāśana
8	結髪式	Caulaṃ	Kṣura
9	入門式	Upanayanaṃ	Upanayana
10	学習誓戒	Mahānāmnī	Śākvara
11	学習誓戒	Mahāvratam	Mahāvrata
12	学習誓戒	Upaniṣadvratam	Aupaniṣada
13	学習誓戒	Godānaṃ	Godāna
14	修了式	Samāvartanaṃ	Samāvartana
15	結婚式	Vivāhaṃ	Pāṇigrahaṇa
16	祭火設置祭	Agnyādheyam	Agnyādhāna

RV = Ṛgveda, SV = Sāmaveda, YV = Yajurveda

儀礼・誓戒の名称は情報源ママ（聞き取り + チャダングから抽出）。

サンスクリット語由来のもの（語尾の -ṃ はマラーヤラム語化による）は立体、マラーヤラム語はイタリックで表記。

Jaiminīya (SV)	Baudhāyana (YV)	Vādhūla (YV)
<i>sekaṃ</i>	Niṣekaṃ	Garbhādhānaṃ
Puṃsavanaṃ	Puṃsavanaṃ	Puṃsavanaṃ
Sīmantaṃ	Sīmantaṃ	Sīmantaṃ
Jātakarmaṃ	Jātakarmaṃ	Jātakarmaṃ
Nāmakaraṇaṃ	Nāmakaraṇaṃ	Nāmakaraṇaṃ
<i>vātir puṣaṅgāṅgā</i>	<i>vātir puṣaṅgāṅgā</i>	Upaniṣkrāmaṃ
<i>coṣuṅṅā</i>	Annaprāśanaṃ	Annaprāśanaṃ
Cauḷaṃ	Cauḷaṃ	Cauḷaṃ
Upanayanaṃ	Upanayanaṃ	Upanayanaṃ
Godānikavratam	Hotāraṃ	Hotāraṃ
Vrātikavratam	Upaniṣadaṃ	Upaniṣadaṃ
Mahānāmnikavratam	Godānaṃ	Śukriyaṃ
Upaniṣadvratam	Śukriyaṃ	Godānaṃ
Samāvartanaṃ	Samāvartanaṃ	Samāvartanaṃ
<i>veli</i>	Vivāhaṃ	Vivāhaṃ
Agnyādhāna	Agnyādhāna	Agnyādhānaṃ

別表2: 他地域の十六儀礼の例

	21世紀初頭のアーンドラ (Knipe [2015] に基づく★)	Pandey [1969] <i>Hindu Śaṃskāras</i> による ṣoḍaśa-śaṃskāra
1	受胎 (Garbhādhāna)	受胎 (Garbhādhāna)
2	男児祈願 (Pūṃsavana)	男児祈願 (Pūṃsavana)
3	妊婦髪分け (Sīmāntonnayana)	妊婦髪分け (Sīmāntonnayana)
4	誕生儀礼 (Jātakarman)	誕生儀礼 (Jātakarma)
5	命名 (Nāmakaraṇa)	命名 (Nāmakaraṇa)
6		初外出 (Niṣkramaṇa)
7	お食い初め (Annaprāśana)	お食い初め (Annaprāśana)
8	結髪式 (Caula)	結髪式 (Cūḍākarāṇa)
9	耳孔空け (Karnaḥhedā)	耳孔空け (Karnaḥhedā)
10		教育開始★★ (Vidyārambha)
11	入門式 (Upanayana)	入門式 (Upanayana)
12		ヴェーダ学習開始 (Vedārambha)
13	鬚剃り式 (Godāna)	鬚剃り式 (Keśānta)
14	修了式 (Samāvartana)	修了式 (Samāvartana)
15	結婚式 (Vivāha)	結婚式 (Vivāha)
16	葬礼 (Antyeṣṭi)	葬礼 (Antyeṣṭi)

★ Knipe [2015] は diacritical marks を用いていない。本一覧での表記は筆者による。

★★ Pandey [1969: 106] によれば、文字の学習を開始する儀礼。口頭伝承を前提とするグリヒヤストラにはこの儀礼の規定はない。

21世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのショーダシャ・クリヤー(十六儀礼)とその特徴

別表1と別表2を比較すると、まず、後者には学習誓戒が一つも入っていないことがわかる。かわりに、学習開始 (Vidyārambha) と称する儀礼——口頭伝承によるヴェーダ学習の開始より前に、文字の読み書きの教育の開始にあたって行うもの——や、耳にピアス孔を空ける儀礼 (Karnabheda) などが数えられている。Knipe はサンスカーラを一覧の形で挙げてはならず、数えてみると16に満たない³⁷。

これらの点を総合すると、別表2にあるのは、ヴェーダ伝承が実質上途絶えている地域で行われる諸儀礼であるといえる。ヴェーダ学習を行わない、あるいは行うにしても学習誓戒を要しない基礎部分しか学ばないならば、ケーララのもののようにヴェーダ学習誓戒だけで16のうち4つも占めてしまうと、行わない儀礼が増えすぎ、実際に行っている儀礼を入れる余地がなくなる。逆にいえば、別表1に学習誓戒4種と祭火設置祭が入っているのは、ナンブーディリのヴェーダ伝承状況が他地域にくらべて良好であることを示している。

ケーララのショーダシャ・クリヤーのもう一つの特徴は、葬礼が算入されていないことである。別表1のとおり、ケーララでの16番目は祭火設置祭である。一方、別表2では、16番目に葬礼 (Antyeṣṭi) が入っている。

十六儀礼は基本的に、人生が進んでいく順にそって並べられているから、最後に葬礼がくることは、一見すると自然に感じられるかもしれない。ただしヴェーダ時代には、葬礼など「死」に関連する儀礼は、人生儀礼とは別扱いされていた。グリヒヤーストラの人生儀礼は、受胎、誕生、子供の成長、結婚、そして次の世代の受胎というように、死の要素をいれず、生を循環させる構造になっており³⁸、葬礼は、グリヒヤーストラの巻末にまとめられるか、ピトリメダーストラで扱われる。主要儀礼を特定の数にまとめはじめたダルマーストラでも、葬礼は算入されていない (3.1 参照)。ケーララの十六儀礼が葬礼を含まないのは、こうしたヴェーダ時代の、生の儀礼と死のそれを分ける伝統と合致している。一方で別表2のように、現代インドでの一般的な十六儀礼に葬

礼が入っているのは、上述した学習誓戒の廃絶とあわせ、他地域におけるヴェーダの伝統の衰退を示しているといえるかもしれない³⁹。

現代のケーララでも、十六儀礼の内訳について人々の間で混乱が生じている例がみられた。本稿の執筆にあたって、ヴェーダ伝承に直接関わっていないナンブーディリであるインフォーマントに、ジャイミニヤー派の内訳を再確認すべく2022年にメールで尋ねたところ、「16番目は葬礼である、祭火設置祭はシュラウタ祭であるからショーダシャ・クリヤーには入らない」との返信があった。しかしながら、2023年初に手嶋英貴氏が別件で現地調査に赴いた際に、氏から同派のヴェーダ学匠にこの点を改めて確認していただいたところ、16番目はやはり祭火設置祭であるとの回答であった。

こうした混乱の原因はいくつか考えられる。家庭儀礼のチャダंगाは、シュラウタ祭である祭火設置祭を扱わない。一方で、16に数えられるもの以外の家庭儀礼は数多くあり、その中には各種の祖霊祭も含まれている。また、人生儀礼の最後を葬礼と考えるのは自然ではある。さらに、ケーララ特有の事情として、21世紀に入ってから大規模シュラウタ祭の挙行回数が増えたことで、グリヒヤ祭とシュラウタ祭の区別が一般の人々の意識にのぼるようになり、祭火設置祭をショーダシャ・クリヤーに含めることを不自然に感じる人がでてきた可能性もある。

ショーダシャ・クリヤーは、16という数ありきで作られた儀礼一覧であって、実際に行われる儀礼すべてを網羅するものではない。これは、儀礼を特定の数の一覧にまとめることが行われ始めた古代から同様だったであろう(3.1参照)。それでも、現代ケーララの各学派の学匠たちが、別表1のように葬礼でなく祭火設置祭を最後におく儀礼一覧を暗記していることには留意すべきである⁴⁰。ケーララの伝統として定着しているのである。

21世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのショーダシャ・クリヤー(十六儀礼)とその特徴

5.2. 各学派の学習誓戒（ヴェーダヴラタ）

別表1のとおり、ケーララのショーダシャ・クリヤーの大枠は、各学派に共通している。学派ごとに異なるのが、4種の学習誓戒(vedavrata)の内訳である。学習誓戒は上述のとおり、ヴェーダの特定の箇所を学ぶ際に行うもので、祭火への献供、師弟間の定型化されたやりとり、一定期間の生活制限の遵守からなる。聖典を異にする学派間には、誓戒を要する学習対象にやや違いがあるため、誓戒の内訳にも差異がある⁴¹。現代のクリヤーの一覧に入っている4種の誓戒は、それぞれの学派のグリヒヤストラにはほぼ辿ることができる⁴²。ただしグリヒヤストラの段階では、学習誓戒の数は学派によって異なり、4種に固定されてはいない。

ヴェーダの学習は、少なくとも理論上は、入門式と修了式間の学生時代に行う。学ぶべき対象は、学習者が所属する学派のサンヒター、そしてブラーフマナ、アーラニヤカ、ウパニシャッドとなる。サンヒターとブラーフマナの基礎部分が入門式後の学習の中核である。入門式に加えて学習誓戒をも要する箇所をいつ学ぶのかについては、グリヒヤストラの記述は曖昧である⁴³。

ヴェーダ聖典をすべて暗記するには、長期にわたる学習を要する。修了式は結婚するまでにすませなければならないから、早い時期に入門したとしても時間は限られている。まして現代の若者は、通常の学校教育を受ける必要があり、時間にはより制約がある。そこで上述のように、現代のインド各地では、入門式と修了式の両方を同日に行ってしまうことが一般的になっている⁴⁴。

ケーララも例外ではない。大多数のナンブーディリ家庭はすでにヴェーダ伝承に関わっておらず、子供の入門式と修了式は親族を招いて行う一種のめでたいイベントとなっており、同じ日に両方をすませることが多くなっている。

ただし一部の家系の、地域のヴェーダ学校で学んでいる子供たちは、入門式から修了式の間、それぞれの家系の所属学派に応じて、ショーダシャ・クリヤーにあるとおりの学習誓戒を、少なくとも形式上行っている。形式上という

のは、たとえ各学習誓戒が対象とする箇所までヴェーダの学習状況が到達していなくても、入門から数年経ったら順次、学習誓戒が行われるのである。つまり、学習誓戒と実際の学習とを切り離すことで、入門から修了まで数年しなくても学習関係の儀礼をすべてこなすことができるようにしている。

現代の学習誓戒は、具体的には、祭火への献供と、師匠による当該テキストないしその一部の朗唱によってなされているようである。師匠に朗唱してもらうことで、学習者自身は完全に暗記していなくとも、その部分を学習したとみなされうる。この簡易で現実的な学習方法は、ヴェーダ文献からみられるものである⁴⁵。

前述のように、21世紀に入ってから、一部の家系で20歳を過ぎた若者たちがシュラウタ祭式に関与する場面が増えた。そこで、すでに形だけ修了式はすませたものの祭式執行に必要なヴェーダ学習をしていない若者が、祭官見習いをしつつ学習を続ける、あるいは再開する例がでてきている。グリヒヤストラが示す、入門と修了の間にヴェーダ学習を終えるという枠組みからは外れているが、学習時期に関するこうした柔軟な対応が、現代社会におけるヴェーダ伝承の継続を可能にしているともいえる。こうした柔軟性も古くからみられるもので⁴⁶、数千年にわたる伝統の維持の下支えとなっている。

むすび

21世紀初頭のケーララにおけるナンブーディリは、現代教育を子弟にほどこす一方で、ショードシャ・クリヤーに代表される諸儀礼のようなヴェーダの伝統を継承している。

結婚と出産、子供が幼いころの諸儀礼（命名、初外出、お食い初め、初結髪）、そして入門式と修了式までの人生儀礼は、家族親族の祝い事として定着している。こうした日常生活に密着している儀礼は、保守性を失うことが少なく、古

21世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのショーダシャ・クリヤー（十六儀礼）とその特徴代のグリヒヤストラの規定が、学派ごとの違いも含めてよく保存されている。

ヴェーダの教授と学習は、一部の家系の子弟に限られるとはいえ行われている。古代からの伝統である、師匠の家での授業という形も完全になくなっていくわけではないが、市中や村にあるヴェーダ学校に通って学ぶという形が増えている。入門式と修了式のほかに、学習誓戒の儀礼も、主に形式上ながら一部で保持されている。その一方で、学習関連の儀礼を行う時期と順序は、学習カリキュラムとの対応をほぼ失っている。このことは、古代の規定からはずれてはいるが、逆に、そのときどきの都合によってヴェーダ学習の中断と再開とを可能にするという柔軟性を生んでいる。

古代から現代の長きにわたって、ヴェーダ伝承は衰退と復興を繰り返してきたであろう。現代ケーララでは、規定からの逸脱を柔軟に認めることによる、伝統継続の一形態をみることができる。

注

¹ 筆者の現地調査はすべて、藤井正人博士、手嶋英貴博士と共同で行った。本稿はその共同調査の報告の一部を兼ねている。本稿の内容の一部は、日本南アジア学会第28回全国大会（於・東京大学、2015年9月27日）でのパネル発表（梶原 [2016a]；藤井・手嶋・梶原 [2016]）と日本印度学仏教学会第69回学術大会（於・東洋大学、2018年9月2日）でのパネル発表（手嶋 [2019]）にて口頭で発表した。本研究はJSPS 科研費 JP17H02268（研究代表者：梶原三恵子）、JP19H01195（研究代表者：手嶋英貴）の助成を受けた。

² 『リグヴェーダ』 10.85（結婚の歌）；10.14-19（葬礼に関する歌）。

³ グリヒヤストラに規定される諸儀礼の概略については、Kane [1974]；Gonda [1977]；Gopal [1983]；永ノ尾 [1992] 参照。

⁴ 上位三階級をさす「ドヴィジャ（dvija 〈[父母からのものと、入門の際に師から生まれるとされるものとの] 二度の誕生をもつ者〉）」という語は、理論上は入門式を行う三階級すべてにあてはまるが、ダルマ文献で四ヴァルナ制度を論じる文脈以外では、ほぼバラモンをさして用いられる。入門時の師からの誕生という概念

については、梶原 [2021] とその参考文献表を参照。

- ⁵ 例: Āpastamba-Dharmasūtra 1.1.1.9 upanayanaṃ vidyārthasya śrūtitaḥ saṃskārah 「聖典によれば、入門式は、知識を目的とする者のサンスカーラである」。
- ⁶ 「サンスカーラ」が入門式をさす比較的古い例: Pāraskara-Gṛhyasūtra 2.5.42 tripuruṣaṃ patitasāvitrīkāṇām apatyē 'saṃskāro nādhyāpanaṃ ca 「三代にわたってパティータ・サーヴィトリカ（入門式を行わなかったために上位三階級社会の成員となれなかった者。注13; 注31も参照）であった人々の子孫には、[入門式という] サンスカーラをもたない者が [生じる]。[彼にはヴェーダ聖典を] 教えることもない」; cf. Manu-Smṛti 2.39（入門式）。また、ダルマ文献は、規範に外れた振る舞いをしたときに行う「過失の打ち消し」（プラーヤシュチッタ）儀礼の一つに、入門式の儀軌の一部をやりなおす「再入門式（プナル・ウパナヤナ〈Punar-Upanayana〉）」というものを規定するが、これは「プナハ・サンスカーラ〈Punaḥ-Saṃskāra〉」ともよばれる。梶原 [2003; 2021: 294-230] ; Kajihara [2016: 286-289] 参照。
- ⁷ saṃ-skṛ の派生語で結婚式が示される例: Āpastamba-Dharmasūtra 2.6.13.3 pūrvavatyām asaṃskṛtāyāṃ varṇāntare ca maithune doṣaḥ 「以前に [他の男と結婚していた] 女に [男が近づく] ときと、サンスカーラが行われていない (a-saṃskṛtā 「結婚式が行われていない; 正式に結婚していない」) 女に [男が近づく] ときと、異なる階級間の性交とには、罪がある」; cf. Manu-Smṛti 2.66-27.
- ⁸ Gonda [1965: 115-130 (Ch. IV, "The Number Sixteen")]; esp. 126 and n. 52]; 渡辺 [1992]; およびこれらに挙げられている参考文献を参照。渡辺 [1992: 184] は Manu-Smṛti 2.38 を引いて「バラモン階級は十六歳で入門式を迎え、バラモン社会の一員として再生するのである」と述べているが、Manu-Smṛti のいうバラモンの入門年齢は受胎から8年目で (Manu 2.36)、16歳は入門上限年齢であるから (Manu 2.38)、「十六歳までに入門式を迎え」と補うべきである。入門年齢については、梶原 [2021: 189-195; esp. 194] 参照。渡辺 [1992: 184] が同箇所て引く Manu 2.65 がいうように、16歳は鬚剃り式 (Godāna / Keśānta) の年齢でもある。
- ⁹ 『シャーンカラ・スムリティ』については、M. Parpola [2000: 40-44] とそこに挙げられている参考文献を参照。同書 [403-410] には、A. Parpola による『シャーンカラ・スムリティ』の一部のローマ字転写と英訳が収録されている。「16の儀礼」への言及は403頁と408頁にある。
- ¹⁰ アタルヴァヴェーダはケーララでは確認されていない。注17も参照。
- ¹¹ ここでは『リグヴェーダ・サンヒター』の意。サンヒター以降のテキストと学習については5.2と注43を参照。

21世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのショーダシャ・クリヤー(十六儀礼)とその特徴

- ¹² 公開を避けているわけではない。筆者の共同調査チームは、何度か立ち会いと撮影を認められた。ヴェーダ伝承に関わっていない人々がわざわざ見にくることはないようだという意味である。
- ¹³ ナンブーディリであっても、ヴェーダ学習および祭式挙行を許されない家系も存在する(藤井 [2012: 280; 297, nn. 19-20])。ナンブーディリ有志によるウェブサイト(Namboothiri Websites Trust; 注 34 参照)のショーダシャ・クリヤーの項目では、そうした家系の者は、入門式、学習誓戒の1つ目、修了式は行わないものの、他の学習誓戒は行わないとしている。現地で普通のナンブーディリから聞き取ったところでは、ヴェーダ伝承に関係のない人生儀礼については師匠格の家系が司祭となつて行うということであった。当該の家系が過去に何らかの禁忌に触れたものと思われるが、現地の人々が話題にすることを好まないため、事情は未詳である。古代のグリヒヤストラとダルマ文献では、規定の年限までに入門式を行わないと「パティタ・サーヴィトリカ(注 6 参照)」となり、祭式執行権を認められず、周囲のバラモンとの交際もできないとされていた。現代のヴェーダへの関与を認められない人々の事情と共通点があるのかは目下不明である。
- ¹⁴ 結婚式は、新郎の学派の儀軌によって行われる。
- ¹⁵ 藤井 [2012: 277-279] 参照。オーイッケンの家系に儀礼を司れる人物がその時点でいないときや、すでに遠隔地に移住していて司祭を依頼できない場合は、本来のオーイッケン家系以外の人物に代理を依頼する。ヴァードゥーラ派のように現存家系が少数の場合、例外的に別学派の師匠格の人物が司祭を務めることもある。ただしその際も本来の学派のチャダंगाが用いられ、あくまで当事者の学派の儀軌に従うことはわからない。
- ¹⁶ ケーララに居住する学派については注 17 を参照。サーマヴェーダ所属ジャイミニヤ派の現存諸写本については、Fujii and Parpola [2016] 参照。写本に基づく同派文献の暫定校訂テキストが近年大量にオンライン公開された [Parpola 2023]。ヤジェルヴェーダ所属ヴァードゥーラ派の文献は、かつてはごく一部がデーヴァナーガリー文字の紙写本のみで知られていたが、1980 年代に井狩彌介博士が、紙写本の書写元を含む多くのマラーヤラム文字の貝葉写本を、同派の師匠格家系の私邸にて同定した [Ikari 1998]。その後、2000 年代に、藤井正人、手嶋英貴、梶原三恵子が、共同調査にて同派の写本の多くをマラーヤラム語のチャダंगा類も含め撮影した。これら以外の学派の師匠邸にも写本が所蔵されている可能性はあるが未詳である。『リグヴェーダ・サンヒター』など、一部の有名なヴェーダ文献は、マラーヤラム文字で活字出版され、現地で市販されている。また、

これまで確認した範囲では、ヤジュルヴェーダの『タイッティリーヤ・サンヒター』のテキストをナンブーディリ有志がマラーヤラム文字で自費出版する動きもあった。

- ¹⁷ ケーララ在住の諸学派は、リグヴェーダ所属のカウシータキ派 (Kauṣītaki) とアーシュヴァラーヤナ派 (Āśvalāyana; 現地では Pakalya ともよばれる)、サーマヴェーダ所属のジャイミニヤ派 (Jaiminīya)、ヤジュルヴェーダ所属のパウダーヤナ派 (Baudhāyana) とヴァードゥーラ派 (Vādhūla; 現地では Vādhūlaka ともよばれる) である。アタルヴァヴェーダはケーララでは確認されていない。
- ¹⁸ たとえばカウシータキ派のものは『カウシータカム・チャダンガ』と題されている。なお、各学派のチャダンガは一種類とは限らない。日常的に用いられる主だったもの以外は活字出版はされていないことも多い。『ウパナヤナ・チャダンガ(入門式のチャダンガ)』のように特定の儀礼名を冠するものもあるが、タイトルにある儀礼に限らず、他の儀礼の解説も続いて入っている例がままある。入門式や結婚式などの主要儀礼をタイトルに冠しておいて他の儀礼も扱う形式は、サンスクリット語のプラヨーガ類などにもみられる。
- ¹⁹ ヤジュルヴェーダ所属ヴァードゥーラ派の、マタシ家 (Mathattir illattū) ヴァースデーヴァン・ナンブーディリ・ソーマヤージバード (Somayājippātū Vāsudevan Nanbūtiri) 著の『ヴァードゥーラカ・チャダンガ』(Vādhūlakaccatānṇū) は、筆者が入手したのは奥付に2002年刊とあり、マラーヤラム文字による活字本で、カラーのカバーがついている。ただし、同派の複数の家庭で用いられていたチャダンガは、より素朴な装丁の古い活字本であった。尋ねたところ、同じくマタシ家のヴァースデーヴァン氏の手によるものとのことだったため、2002年版はその組み直しと思われるが、確認はできていない。2010年にマタシ家の人々から聞き取ったところでは、ヴァースデーヴァン氏(聞き取り時点では故人となっていた)はチャダンガを一から作ったのではなく、儀礼に精通していることで名高かった氏が、生前に学んだことや当時の習慣をチャダンガとしてまとめたとのことであった。
- ²⁰ 現代ヒンドゥー儀礼は、ケーララでは「タントラ」とよばれる。藤井 [2012; 2016]、手嶋 [2016; 2017] と、これらに挙げられている先行研究を参照。
- ²¹ 女性はヴェーダを学べないが、祭主の妻は祭場にいなければならない。
- ²² あえて老年に入ってから祭火設置祭を行った例を、調査期間中に確認した。ヴェーダ祭式を祭主として挙行することでナンブーディリ社会の中でのステータスが上昇する仕組みについては、本稿4.4、注32、および藤井 [2012; 2016] 参照。

21世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのショーダシヤ・クリヤー(十六儀礼)とその特徴

²³ 広大な祭場を作って多くの人々が関与する大規模な祭式(アグニチャヤナ祭など)の挙行回数が21世紀に入ってから増加している背景については、藤井[2012]とそこに挙げられている参考文献を参照。現代ケーララにおけるヒンドゥーの宗教伝統(「タントラ」;注20参照)とヴェーダの伝統の関係については、藤井[2016];藤井・手嶋・梶原[2016];手嶋[2016;2017]と、これらに挙げられている参考文献を参照。

²⁴ 欧米の研究者たちが現代のヴェーダ祭式を直接観察しうる最初のきっかけとなったのは、1975年にケーララ州パンニヤールで行われたアグニチャヤナ祭である。当時の経緯と記録およびそれをふまえた研究についてはStaal[1983]参照。21世紀に入ってから、特にアグニチャヤナ(アティラートラ)祭が行われる際に、マラーヤラム語に加えて英語でもウェブサイトが作られて広報される例が増え、インドの外からでも祭式挙行の情報がある程度得られるようになっていく。英語での情報発信は、基本的にはマラーヤラム語が通じないインドの他州や海外在住のインド人のためとみられるが、筆者の知る限りでは、インド人以外の見学や調査も制限されていない。

²⁵ ヴェーダ文献学をふまえて現代ナンブーディリの家庭儀礼を研究した主なものに以下がある。

- ・Parpola, Asko [1986]: サーマヴェーダ・ジャイミニヤ派の「お食い初め(Annaprāśana)」について、同派のチャダンガの当該章を英訳し、同派のグリヒヤストラの規定と比較した研究。
- ・Parpola, Asko [2012]: ジャイミニヤ派の「スターリーパーカ(Stālīpāka; 家庭儀礼における祭火への献供の基本形)」について、同派のチャダンガの当該章を英訳し、同派のグリヒヤストラの規定と比較した研究。
- ・Parpola, Marjatta [2000]: 1980年代のジャイミニヤ派の師匠家系を中心に、ナンブーディリの生活と当時の長老たちの証言を記録し分析した研究。
- ・Kajihara [2017: 1-2; 12-14]: ヤジュルヴェーダ・ヴァードウーラ派の結婚式における「花嫁の授与の儀」(kanyādāna <カニヤダーナ>); 現代ケーララではudakapūrva <ウダカプールヴァ(水を先とする[贈与])>とよばれる)について、2011年の藤井・手嶋・梶原による現地調査と、同派のグリヒヤストラおよび補遺文献(Vyākhyā; Rahasya; Prayoga)の諸写本の記述とを比較検討した。授与・贈与にあたって水が贈与を先導する儀礼行為については、梶原[2016b]参照。

²⁶ 入門年齢については、梶原[2021: 189-195]参照。

²⁷ Fujii [2012: 110, n. 44]によると、20世紀末のケーララにはまだ、20世紀初めに

生まれ、入門式、4つ+1つの学習誓戒、修了式、という一通りの儀礼をとおして所属学派の全ヴェーダを学習し、祭火設置祭も行ったナンブーディリ学匠が実際にいた。

- ²⁸ M. Parpola [2000: 168ff.; passim] 参照。
- ²⁹ Brahma Sva Maṭha；正式名称は Vadakke Madham Brahmaswam. リグヴェーダの教育を主眼とするが、筆者が訪問した時点ではヤジュルヴェーダとサーマヴェーダの学習者をも少数ながら教えていた。
- ³⁰ Mahadevan and Staal [2005: 372f.] 参照。
- ³¹ M. Parpola [2000] 参照。以下に述べるとおり、筆者の2010年代の聞き取りもこれを裏付けていた。なお、入門式の儀軌には、サーヴィトリとよばれるリグヴェーダの詩節を教わる儀が組み込まれているので、入門式を受ける者は、少なくともこの詩節は学習することになる。サーヴィトリ (Sāvitrī; 別名ガーヤトリ Gāyatrī) は、ヴェーダ時代から特別に神聖視される詩節で、一般には『リグヴェーダ・サンヒター』3.62.10をさす。サーヴィトリ詩節の神聖視の歴史については、Kajihara [2018-2019] 参照。
- ³² 順に、アディティリ・パード (祭火設置者)、ソーマヤージ・パード (ソーマ祭執行者)、アキティリ・パード (アグニチャヤナ執行者) という称号を、氏名に付して名乗れるようになる。Fujii [2012: 109, n. 40]；藤井 [2012: 280] 参照。
- ³³ Mahadevan and Staal [2005: 368]；藤井 [2012: 290] 参照。*Times of India* (2015年3月30日、電子版) は「アティラトラ祭に若いヴェーダ朗唱者たちが参加 (“Athirathram finds young Vedic chanters”)」と題し、近年の大規模祭式に一部の若い世代のナンブーディリが参加するようになってきていること、その背景にはスポンサーによる多額の支出があること、祭式がナンブーディリにとって収入を得るための職業になりえてきていること (“Today, it is also a paying profession”)などを伝えている。
- ³⁴ ナンブーディリ有志が作成し公開しているウェブサイト Namboothiri Websites Trust (URLは参考文献参照) に「Shodasakriyakal」の項目がある。明記されていないが、立ち上げたのは注33で言及した *Times of India* の記事の著者であるらしい (Mahadevan and Staal [2005: 368])。列挙されている学習誓戒 (後述) の内訳はリグヴェーダ系学派のものである。
- ³⁵ すでに1980年代に、主要家系の長老ですら自学派の十六儀礼の内訳を即答できなかったと、M. Parpola [2000: 153] が報告している。Parpolaは、当時はもう十六儀礼のすべてを行うわけではなく、行うとしても時期が規定どおりではなくなっ

ていたことをその理由として挙げている [M. Parpola 2000: *ibid.* and *passim*]。後掲の一覧にある儀礼のうち、結髪式はもう行われておらず、修了式は結婚式の直前に行われるようになってきている、との記載もある。ただし、Parpola の調査報告は、特定のヴェーダ伝承家系(サーマヴェーダ所属ジャイミニーヤ派の師匠家)に調査のベースをおいて1980年代のナンブーディリ社会を描き出したものである点に留意しておくべきであろう。ケーララ中部の狭いナンブーディリ社会にもさまざまな家があり、数十年もすれば状況もまた変化する。筆者が2010年代に各学派の家系を回りつつ調査した際は、結髪式は確認できなかったもの(見聞きしなかっただけで、行われていないとは限らない)、子供のお食い初めを家族親族のイベントのように行い記念写真を残している家もあったし、修了式は結婚式とではなく入門式とセットになって行われていた。また、筆者の観察した限りでは、人々が16の儀礼をすぐに数え上げられない主な理由は、それらが廃れたり忘れられたりしているからではなく、「子供が初めて耳にピアスの孔を空ける儀(Karṇabheda)」や「[ヴェーダ以外の]学習開始の儀(Vidyārambha)」など、グリヒヤストラより後の時代に人生儀礼として数えられるようになったものをも算入しているうちに、数が増えてしまうからであった。

³⁶ 古代の『ガウタマ・ダルマストラ』の40儀礼にもシュラウタ祭が入っているのは、上でみたとおりである(3.1)。

³⁷ Knipe [2015: 172-175]によれば、サンスカーラの数16が理想ではあるものの、彼が観察したアードラでは、人生儀礼の数は定まっておらず誰もが行うわけでもないという。学習誓戒については同書に記述はみあたらない。Knipeは調査対象の学派も明記していないが、同地域ではアースタンバ派のグリヒヤストラに沿って諸儀礼を行う家庭が多いとしている(Knipe [2015: 173-175])。

³⁸ グリヒヤストラにおける人生儀礼の循環構造については、Oldenberg [1892: xxv]; 永ノ尾 [1992: 68] 参照。永ノ尾 [1992: 79] は、グリヒヤストラのなかで祖霊儀礼に次第に重きがおかれるようになるにつれて「生の循環」がくずれていく傾向を指摘しているが、誕生、成長、結婚、誕生という生の儀礼の循環構造自体はわからない。

³⁹ 比較的古くから葬礼を人生儀礼とみなすテキストもあったことについては、Pandey [1969: 23f.] 参照。Cf. Manu-Smṛti 2.16 *niṣekādīśmaśānānto mantrair yasyodito vidhiḥ / tasya śāstre 'dhikāro 'smiñ jñeyo nānyasya kasya cit //* 「受胎[儀礼]に始まり葬場[の儀礼]に終わる儀軌がマントラとともに述べられている者に、この教えにおける権利が知られるべきである。他のいかなる者にも[それは]ない」。

- ⁴⁰ ナンブーディリのウェブサイト (Namboothiri Websites Trust) でも、シヨーダシヤ・クリヤーの16番目は祭火設置祭である。
- ⁴¹ 誓戒の名称が同じでも学習対象が異なることがある。鬚剃り式 (Godāna) が学習誓戒としても扱われることについては、Kajihara [2022] 参照。
- ⁴² グリヒヤーストラ段階での学派ごとの学習誓戒の内訳については、梶原 [2005] ; Kajihara [2022] 参照。
- ⁴³ 上述のように、入門式の後で学ぶのは基本的にサンヒターとブラーフマナである。グリヒヤーストラの規定では、特定のテキスト (主に一部のアーラニヤカとウパニシャッド) は、改めて入門式を行って、準備期間をおいてから、学習すべきとされる。この準備期間に行うのが学習誓戒である。アーラニヤカやウパニシャッドといった奥義の部分については、もともとは基本部分の学習を修了した家長や学匠が改めて師に入門して学ぶものだったことを伺わせる挿話群が、ウパニシャッドに散在する。そうした習慣が学習誓戒の原型になったとみられる。梶原 [2021: 259-289] ; Kajihara [2022] 参照。
- ⁴⁴ その場合、入門式の儀軌に組み込まれているサーヴィトリー詩節の学習以外、入門から修了までの間にヴェーダを学ばないことになる。
- ⁴⁵ シュラウターストラにある規定の例：「次に、一年がたったら、[ブラヴァルギヤ祭の章を自らに] 学習させる (学ぶ)。あるいは [教授者の朗唱を自らに] 聞かせる [ことで学習に代える]」(Baudhāyana-Śrautasūtra 9.20: 297.3 atha saṃvatsare paryavete 'dhyāpayate śrāvayate vā)。
- ⁴⁶ たとえば、ヴェーダ学習修了者 (スナータカ 〈snātaka 「[修了の] 沐浴を終えた者」〉) に三種を数えるグリヒヤーストラがある：「スナータカは三種あると、アールニ・ガウタマは言ったものだった、[すなわち] 知識のスナータカ (学習のみを終えて修了した者) と、誓戒のスナータカ (誓戒のみを終えた者) と、知識と誓戒とのスナータカ (学習と誓戒との両方を終えた者) とが。このうち、最後のものが最も優れている。最初の二者は同等である」(Jaimini-Gṛhyasūtra 1.19: 18.10-12 trayāḥ snātakā bhavanti ha smāhāruṇiḥ gautamo vidyāsnātako vratasnātako vidyāvratasnātaka iti teṣāṃ uttamah śreṣṭhas tulyau pūrvau)。ここでいわれている誓戒は、狭義の学習誓戒というより、学生としての生活制限全般かもしれない。

21世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのショーダシヤ・クリヤー(十六儀礼)とその特徴
参考文献

- 永ノ尾信悟 1992.「グリフヤストラ文献にみられる儀礼変容」『東洋文化研究所紀要』118: 43-84.
- 梶原三恵子 2003.「入門式 (Upanayana) と再入門式」『印度学仏教学研究』52(1): 22-24.
- 梶原三恵子 2005.「ヴェーダ学習と誓戒」『小林圓照博士古稀記念論集 佛教の思想と文化の諸相』161-175. 花園大學禪学研究会.
- 梶原三恵子 2016a.「家庭儀礼一覧『十六行事』からみるナンブーディリ社会の現在」『南アジア研究』28: 232-234.
- 梶原三恵子 2016b.「古代インドにおける授与の諸儀礼と水」『印度学仏教学研究』65(1): 283-290.
- 梶原三恵子 2021.『古代インドの入門儀礼』法藏館.
- 手嶋英貴 2016.「ケーララ州の寺院司祭・タントリ —— 家系と職務、ヴェーダ伝承との関わり」『南アジア研究』28: 231-232.
- 手嶋英貴 2017.「ケーララ州のヒンドゥー寺院司祭・タントリ —— その職務と家系、ヴェーダ伝承との関わり」『人文學報』110: 121-147.
- 手嶋英貴 2019.「現代インドにおけるヴェーダ祭式の文化的・社会的プレゼンス —— ケーララ州の事例から探る」(井狩彌介・手嶋英貴・梶原三恵子・藤井正人によるパネルの要旨. 梶原担当報告:「グリヒヤ祭にみる『伝統』と『慣習』)『印度学仏教学研究』67(2): 234-235.
- 藤井正人 2012.「ヴェーダの復興 —— 南インド・ケーララ州における古代と現代の接触」『コンタクト・ゾーンの人文学』(田中雅一・小池郁子編) 3: 270-302. 晃洋書房.
- 藤井正人 2016.「ヴェーダとナンブーディリ社会」『南アジア研究』28: 229-230.
- 藤井正人・手嶋英貴・梶原三恵子 2016.「ケーララ州におけるブラーマン社会の現在」『南アジア研究』28: 228-234.
- 渡辺章悟 1992.「インドの宗教に於ける『十六』の概念」『井上円了センター年報』1: 190-159.
- Fujii, Masato 2012. The Jaiminīya Sāmaveda Traditions and Manuscripts in South India. *Aspects of Manuscript Culture in South India* (ed. Saraju Rath): 99-118. Leiden.
- Fujii, Masato and Asko Parpola 2016. Manuscripts of the Jaiminīya Sāmaveda Traced and Photographed in 2002-2006. *Vedic Investigations* (ed. Asko Parpola and Petteri Koskikallio): 127-162. Delhi.

- Gonda, J. 1965. *Change and Continuity in Indian Religion*. The Hague / London / Paris.
- Gonda, J. 1980. *Vedic Ritual: The Non-Solemn Rites*. Leiden / Köln.
- Gopal, Ram 1983. *India of Vedic Kalpasūtras*. 2nd edition (1st ed.: 1959). Delhi.
- Ikari, Yasuke 1998. A Survey of the New Manuscripts of the Vādhūla School — MSS. of K1 and K4. *ZINBUN: Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University* 33: 1-17.
- Kajihara, Mieko 2016. The Upanayana and the 'Repeated Upanayana (s)'. *Vedic Investigations* (ed. Asko Parpola and Petteri Koskikallio): 271-296. Delhi.
- Kajihara, Mieko 2017. Giving the Bride to the Bridegroom with Water at the Ancient Indian Marriage Ritual. *Studies in Indian Philosophy and Buddhism* 25: 1-30.
- Kajihara, Mieko 2018-2019. The Sacred Verse Sāvitrī in the Vedic Religion and Beyond. *Journal of Indological Studies* 30 & 31: 1-36.
- Kajihara, Mieko 2022. The Observances or *vedavratas* for Learning of the Veda. *Studies in Indian Philosophy and Buddhism* 30: 1-25.
- Kane, Pandurang Vaman 1974. *History of Dharmasāstra. Ancient and Mediaeval Religious and Civil Law*. Vol. II-1 (2nd edition). Poona.
- Knipe, David M. 2015. *Vedic Voices. Intimate Narratives of a Living Andhra Tradition*. Oxford.
- Mahadevan, T. P and Frits Staal 2005. The Turning Point in a Living Tradition: Somayāgam 2003. *Indische Kultur im Kontext: Rituale, Texte und Ideen aus Indien und der Welt* (hrsg. von Lars Göhler): 365-389. Wiesbaden.
- Namboothiri Websites Trust n.d. *Shodasakriyakal* (<http://www.namboothiri.com>; <https://www.namboothiri.com/articles/shodasakriyakal.htm>). 最終閲覧日：2023年9月2日。
- Oldenberg, Hermann 1892. *The Grihya-Sūtras: Rules of Vedic Domestic Ceremonies. Part II: Gobhila, Hiranyakesin, Āpastamba* (with Āpastamba's *Yagña Paribhāshā-sūtras* tr. by F. Max Müller). The Sacred Books of the East 30. Oxford.
- Pandey, Rajbali 1969. *Hindu Saṃskāras: Socio-religious study of the Hindu sacraments*. 2nd revised edition. Delhi.
- Parpola, Asko 1986. Jaiminīya Texts and the First Feeding of Solid Food. *South Asian Religion and Society* (ed. Asko Parpola and Bent Smidt Hansen): 68-96. Copenhagen.
- Parpola, Asko 2011. Codification of Vedic domestic ritual in Kerala: *Pārvana-sthālīpāka* — the model of rites with fire-offerings — in *Jaiminīya-Gṛhyasūtra* 1,1-4 and in the

21世紀初頭ケーララ州ナンブーディリ・ブラーマンのシヨウダシヤ・クリヤー(十六儀礼)とその特徴

Malayālam manual of the Sāmaveda Nampūtiri Brahmins of Kerala, the *Sāma-Smārtta-Çaṭāññū*. *Travaux de symposium international le livre, la Roumanie, l'Europe*, 3: 261-354.

Parpola, Asko 2023. Jaimini-Śrauta-Sūtra with Bhavatrāta's Vṛtti and Śrauta-Kārikā. Preliminary Edition. *Electronic Journal of Vedic Studies* 7, Issue 1.

<https://hasp.uni-heidelberg.de/journals/ejvs/issue/view/1280> (2023年9月時点で、同誌 Vol. 7 の Issues 1-10 にジャイミニーヤ派の各種テキストが公開されている)。

Parpola, Marjatta 2000. *Kerala Brahmins in Transition. A Study of a Nampūtiri Family*. Helsinki.

Staal, Frits 1983. *Agni: The Vedic ritual of the fire altar*. In collaboration with C. V. Somayajipad, M. Itti Ravi Nambudiri; photographs by Adelaide de Menil. Berkeley.

Times of India, March 30, 2015. "Athirathram finds young Vedic chanters."

<https://timesofindia.indiatimes.com/city/kochi/athirathram-finds-young-vedic-chanters/articleshow/46740375.cms>

On the List of the Sixteen Rites (*ṣoḍaśakriyā*) of the Nambudiri Brahmins in Kerala

KAJIHARA Mieko

In modern India, the rites that the Hindus should perform are often listed as being sixteen. The lists are generally called “*ṣoḍaśa-saṃskāra*.” The Nambudiri Brahmins in Kerala, where the Vedic tradition is comparatively well kept, also have such a list which they call “*ṣoḍaśa-kriyā*.” Kerala’s list has several significant differences from those in the other regions of India. What the *ṣoḍaśa-kriyā* includes but the *ṣoḍaśa-saṃskāras* of the different areas do not are the detailed rites for learning the Veda and setting up fires necessary for the Vedic rituals. On the other hand, it does not include the funeral ritual, while the other regions do. These characteristics of the *ṣoḍaśa-kriyā* reflect the ancient Vedic tradition kept in today’s Kerala.